直海谷川。

ナホミガハ　直海川（ノウミガハ）　羽咋郡荒屋・谷神領の山より流出、直海附近に於いて直海川といひ、下流は米町川・川尻川と稱する。

ナホミシラヤマジンジヤ　直海白山神社（ノウミ）　羽咋郡直海に鎮座する。里人は白山宮とも多武の御嶽ともいふ。天文四年國澤六郎兵衛尉藤原德長建立の棟札及び寛永六年村井飛驒守長家社修造の棟札がある。社僧に洞禪寺があつた。

ナホミダニ　直海谷（ノミダニ）　石川郡河内庄口直海から中直海・久保・吹上・板尾・金間・下折・内尾を經て奥池に至るまでは、一の溪谷に添うた邑里で、之を直海谷と總稱し、直海谷川が之を流れて居る。金間右衛門が之を領したとも傳へる。

ナホミダニガハ　直海谷川（ノミダニガハ）　石川郡にあつて、直海川ともいふ。源を奥三方岳に發し、西北流して奥池に至り、松尾山東方山地より發する一溪流を容れ、西流して内尾を經、西北に向かうて板尾に至り、こゝに口三方岳より源を發し不動瀧を經る長溪流を右岸より合はせ、板尾より北流し、口直海に至つて手取川に合流する。流程二〇粁。蔭涼軒日錄寛正三年六月八日の條に見える濃美川も直海川に同じい。

ナホミホ　直海保　羽咋郡に在つた。應永十九年八月十一日天野彦次郎宛所の判書に、『能登國直海保内北浦一分地頭職事』又應永廿四年十月二日二階堂山城の判書に、『能登國直海保之内熊野方云々』とある。直海保は後の直海村であらう。

ナホヤマダイム　直山大夢　金澤の俳人。通稱宗四郎。初め藩の御算用場に勤務し、後寺子屋を開いて兒童に敎へた。俳諧は之を梅室に學んで貫蓉と號し、天保十年大夢と改め、その居を忘庵と名づけたが、十三年槐庵五代大常歿して、翌年六代を繼席し、後慶應二年三月南無庵三代を稱して蒼虬の嗣となり、明治七年二月十七日八十一歲で歿。その著能登めぐりは句畵共に自ら書いたものであつた。

ナホヤマミチヲ　直山道雄　金澤の俳人。通稱喜久郎。大夢の子で、御算用場に出仕した。初め蕉窓と號し、槐庵七代を繼席し、明治六年三月四十九歲を以て歿。

ナマガシ　生菓子　金澤特有の大きな餅菓子で、鶉・饅頭・ササラ・羊羹・エガラの五種がある。鶉は餅皮で餡を細長く菱形に包んだもの、饅頭は麥の皮を用ひ、ササラは白又は赤の餅の皮を用ひ、エガラは餅皮に黄色の米粒を附して、並びに餡を包み、羊羹は餡と米粉を混じて作り長方形に切つたものである。前田利長の頃から博勞町の菓子屋吉藏が之を調製上納した。生菓子は吉事には饅頭を省き、凶事には赤サヽラを除きて五重の行器に收めて贈り、その外箱は黑塗で、兩面に朱漆で大きく製造者の商標が記され、屋外に積み重ねられたものである。この箱を蒸籠というたが、それは固より誤である。

ナマカベザイク　生壁細工　聖土を用ひ鏝を以て、畵又は文字を作り、額面又は聯とするもの。藩の御壁塗堀越左源次最もその技を能くした。

ナマコ　生海鼠　能登の産を名物とし、その精製して幕府が長崎に輸出したのは、鹿島郡小島・津向・三室・日出々島・野崎・鰀目・祖母浦・向田・曲及び鳳至郡甲の十浦で捕獲するもので、七尾の瀧屋清五郎が一手に取扱うた。大生海鼠を鍋で煎り上げたものを煎海鼠（イリコ）といひ、煎海鼠を繩で一つ充緊いだものをぶら海鼠（クシコ）といふ。串海鼠は串にさして干したもの。繩海鼠は串海鼠とし離きものを繩に通して干したもの。つなぎ海鼠は串海鼠にも繩海鼠にもならぬものを片つなぎで干立てたもので、ぶら海鼠に能く似てゐる。能登で金海鼠（キンコ）というたのは煎海鼠の一名で、奥州に産する金海鼠とは異つてゐる。煎海鼠に就いては、親元日記文明十三年五月朔日に、『畠山左衛門佐より御進上到來云々、煎海鼠十束。』などゝ見え、串海鼠は武鑑所載加賀藩の幕府に對する献上物中にも見える。

ナマヅバシ　鯰橋　江沼郡大聖寺なる本町と中町との間に在る。江沼志稿に長六間・幅三間。往古は鍛冶町江戸屋八左衛門居宅の東方に在つたのを、川筋改鑿の際今の位置に轉じたとある。慶長五年の役に、前田利長が南郷から進擊した時大聖寺の城兵が町口を破られぬため鯰橋から出て防いだといふのは卽ち舊時の橋である。

ナミキ　並木　街道の並木を栽植する目的は、第一に道敷の幅員を定める所以であり、第二に旅客を風雪の害から保護し、第三に河水の護岸の爲で、主として松が植ゑられたが、稀に杉・楓・榎も植ゑられた。並松は加賀藩では北陸沿道に之を列植し、慶長六年に初るといひ、楓並木の例は犀川の附近に、榎並木の例は淺野川の堤防地に在る。

ナミキマチ　並木町　金澤の町名。淺野川に添ひ、堤防に松樹があるによつて名を得る。或はいふ、犀川・淺野川の堤防に昔は北陸道に於けるが如く、前田利常の時に植ゑた列松があつたが、後に風害の爲に折れ又は水害の爲に倒れて、今僅かに存するのであると。

ナミマツ　並松　源平盛衰記藩永二年に、『平家成合を引篠原に着、源氏同抑寄たり。平家不堪して山に入、極樂林・小野寺林・須川林に亂入ければ、源氏續てひら責に攻む。福田・熊坂・江沼邊をも責越て、濱路迄こそ追懸たれ。平家並松と云處にて返合て暫し支て戰けり。』大日本史義仲傳には『大戰二于篠原一平軍敗走。長驅至二成合並松一連破レ之。』とある。越登賀三州志に、この並松を列松の義で、地名ではないとしてゐるが、加賀志徵は、越前坂井郡の海岸浪松村だとして居る。後說に從ふべきであらう。

ナミヨシノブハル　波吉信治　波寄信安の子。幼名菊法師、後喜之尉。天正十二年前田利家に召されて技を演じ、慶長七年初めて利長に祿せられ、爾後波寄氏を改めて波吉と稱し、寛永十五年利常が河北郡黑津舟神社を造營し、三月その遷座式を行うた時には、信治をして法樂の爲に能を奏せしめた。後利常の隱栖に小松に從ひ、明暦三年三月四日九十四歲を以て歿。子孫世々諸橋氏と並んで加賀藩の能大夫であつた。波吉氏の家藝は、初世以來觀世流であつたが、四代伊右衛門信秀の時金春流に變じ、六代右内信重に至り元祿十三年寶生流に歸した。

ナミヨセノブヤス　波寄信安　又信親にも作られる。波寄氏は加賀の能太夫で、室町末期に起るといふが閥歷は明らかでない。同家の由緒帳によれば信安を初祖として、『一世波